

## 【はじめに】

少子化や基礎科学への関心の低下に伴い、各学会とも会員数の減少に苦しんでいる。細胞生物学会は、学生会員の大会参加費無料化や若手の会、若手優秀発表賞などの対策を行って会員数の減少に歯止めをかけているが、このまま無対策であれば、いずれは衰退・消滅の道をたどる。そこで本委員会では、細胞生物学会の存在意義を明確にすることによって、細胞生物学会の将来計画について献策することを目的とした。

## 【委員の構成】

従来の委員会の枠組みにとらわれず、様々な背景を持つ人物を委員として選出した。

西村亮祐（院生）	徳島大学医学研究科
温田晃弘（院生）	北海道大学生命科学院
青木佳南（院生）	九州大学システム生命科学府
入江和樹（院生）	東北大学生命科学研究科
伊藤志帆（院生）	京都大学農学研究科
小松原晃（PI 候補者）	京都大学生命科学研究科
小幡裕希（PI 候補者）	東京理科大学生命医科学研究所
小田裕香子（PI 候補者）	京都大学生命科学研究科
矢木宏和（PI 候補者・糖質学会）	名古屋市立大学大学院薬学研究科
生沼泉（PI・生化学会）	兵庫県立大学生命理学研究科
東山哲也（PI・植物研究者）	名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所
倉永英里奈（PI・発生生物学会）	東北大学生命科学研究科
石原直忠（PI）	久留米大学分子生命科学研究所
池ノ内順一（PI）	九州大学大学院理学研究院
井垣達吏（PI）	京都大学生命科学研究科
椛島健治（PI・医学研究者）	京都大学医学研究科
米村重信（副委員長）	徳島大学医学研究科
吉田秀郎（委員長）	兵庫県立大学生命理学研究科

## 【現状把握と問題提起】

細胞生物学会の会員数は、1997年（1,812名）から2012年（1,181名）まで減少傾向にあったが、その後は2016年（1,239名）までほぼ横ばいの状態が続いている。大会参加者に関しても、2008年（559名）から2016年（684名）までほぼ横ばいである。分子生物学会の会員数が2013年（15,000名）から2017年（13,000名）に減少するなど他の学会の会員数が減少する傾向にあるのに対して、細胞生物学会は健全な状態にあると言える。これは以前の将来計画委員会（吉森保委員長・濱崎洋子委員長）の献策に従って大会を魅力的なものにしたり、若手発表賞や若手の会・学生の参加費無料化などの積極的な若手支援によって達成されたものである。しかしながら、少子化のために18才人口は1992年（205万人）から2031年（99万人）に激減することから、このまま新たな対策を取らない限り、細胞生物学会も消滅の危機を迎えることとなる。

## 【献策】

### 細胞生物学会の存在意義

分子生物学会や生化学会が巨大化した現在、細胞生物学会のような中小学会に求められる存在意義の一つは、若手を育成して次世代の研究者（PI）を生み出す揺りかごとである。若手の育成方法にもいろいろな考え方がある。発生生物学会は阿形清和元会長に代表されるように、若手におもねず、PIの背中を見せることによって若手の自発的な成長を促す方法をとっている。その結果、発生生物学会ではTシャツ・短パンをはいた「生きのいい」生意気な若手がのびのびと育っている。一方、細胞生物学会は若手の会や若手優秀発表賞のような若手支援策を行うとともに、若手とPIとの距離を縮める努力をすることで手厚く若手を育成する方法をとってきた。その結果、細胞生物学会ではスーツを着て学会の将来を真剣に心配する「まじめな」若手がすくすくと育っている。発生生物学会と細胞生物学会が違う個性を持つ若手を育成し、科学界に多様な人材を供給することは非常に意義のあることである。また、若手といっても様々な個性を持っており、それぞれの個性に応じて学会を選ぶ選択肢を持つことは若手にとってもしあわせなことである。従って、細胞生物学会はこれまで通りの方針で若手を育成することが重要と考える。積極的にいろいろな学会と合同大会を行うことで様々な刺激を受け、他学会のいいところは取り入れ、守るところは守るという方針で進むべきであろう。

もちろん、細胞生物学会のもう一つの存在意義は、優れたサイエンスを支援することである。若手ばかりではなく、シニアも楽しめる大会プログラムであることが基本であ

る。但し、分子生物学会や生化学会のようにシニアに時間的・心理的な余裕がないところは、真似するべきではない。若手を育成するという観点を忘れずにいることが細胞生物学会の特色であると考え。また、分子生物学会など巨大な学会ではビッグサイエンスに囲まれてかすんでしまう地道な研究も積極的にピックアップすることが望まれる。

### 細胞生物学会の優れた特色

現在の学会の規模であればお互いの顔が見え、知らない分野の講演も聴く余裕があり、シニアと若手の距離も近いことから、学会の規模を大きくする必要はないと考える。また若手の意見として、学会の雰囲気も堅苦しくなく参加しやすいこと、若手に対して学会が期待していることを感じることで、若手の会や若手優秀発表賞など若手の支援体制が充実していること、若手の意見を採用してくれることが細胞生物学会の優れている点であるという指摘があった。特に、若手の会は大会の前夜祭的なものとなりつつあり、若手にとって知り合いを増やすとともに質問する勇気をつける場でもあり、またシニアな研究者とふれあう重要なイベントとなっている。まだまだ参加者が限定されていることから、若手の会にもっと多くの学生やシニア研究者が参加するよう宣伝することが重要と考える。若手の会での大御所の苦労話は特に好評である。シニア研究者との出会いが若手研究者の人生を変えることが多々あるため、これらの仕掛け作りを更によくしていくことが望まれる。若手の会を1泊2日にしてエクスカージョンを含めるようなことがあってもいいかもしれない。また、若手の会の組織をよりしっかりした組織とし、他の学会の若手の会との連携も視野に入れるべきである。また、イメージングに関するセッションは他学会に比べても素晴らしいものがある。イメージングが強い学会として差別化していくことも可能であろう。

### 学会が抱える諸問題に対する対策

上記の様に、現在行っている若手支援策は若手に非常に好評であるとともに、細胞生物学会の若手が非常に元気であることは喜ばしいことである。但し、問題がないわけではない。たとえば、大会で質問をしている若手はいつも同じメンバーであることが多く、細胞生物学会の学生にとって大会で質問することはまだまだハードルが高い。学生の側が質問のトレーニングをするとともに、学生が質問をしやすくなるような仕組みを作ることが必要と考える。また、子育て研究者にとって遠隔地での大会参加は物理的に困難である。Skypeでの講演を認めるなど、ITを活用した支援策も検討の価値がある。更

に、6月は国際学会も多く、大会開催の時期を考慮することも必要である。若手がP Iになるための支援策としては若手優秀発表賞があるが、まだまだ不足である。細胞生物学会に入れ込んでいる若手をP Iに積極的に引き上げるような仕組みがあってもよいと考える。少なくとも、彼らP I候補者の意見（愚痴）を聞く窓口があってしかるべきである。細胞生物学会にどのようなP I候補者がいるのかリストを作って公開したり、大会でjob huntingのようなセッションを企画することも一案であろう。

### 将来計画についての献策

現在の細胞生物学会には、学会に愛着を感じる会員が残っているものと思われる。これまで先達が築いてきた学会を受け継ぎ、次世代に受け渡すためには、会員一人一人が学会をよく知り、大切に作る気持ちを持つことが重要である。学会側も若手やP I候補者、シニアなど様々な会員の意見を積極的に聴取するとともに、学会の方針や施策を会員に定期的に宣伝する方策を採るべきである。殺伐とした競争原理が支配する巨大学会を目指すのではなく、会員のホームグラウンドとして次世代の育成も担うコンパクトな学会を維持することを目指すべきであろう。

従って、細胞生物学会の好敵手は分子生物学会ではなく、同じ存在意義を担っている班会議や小規模集会である。これらの小規模集会の「武器」は、懇親会とニュースレターである。細胞生物学会の懇親会と会報は「巻頭言」に代表される個性的な独自色を出す優れたコンテンツが豊富であるが、シャペロン班やメンブレントラフィック班の懇親会やニュースレターの域までは達していない（御存じない方は、是非こちらを御参照ください：<http://www.fbs.osaka-u.ac.jp/labs/yoshimori/jp/blog/prof-a-hill-episode3/>）。懇親会の出し物を工夫したり（中野会長のように楽器を演奏することで会長の個性を出すこともありであろう）、会報を通じて会長が熱いメッセージを会員に送り、若手やP I候補者の真摯な思いを巻頭言として掲載することなど、工夫する余地がまだまだあると考えられる。これらの武器を用いることで、会員間の連帯感を醸成することが望まれる。

細胞生物学会を学会競合による「細胞死」に追いやらないために、上記の方針をもって学会を持続的に発展させていくことを献策する。以下、具体的なアイデアを列記する。互いに相反するアイデアがあるなど、すべてを実行することは不可能だが、これらのアイデアを端緒として優れた実行策を練り上げていただければと願っている。

## 【具体的アイデア】

### 【若手支援対策】

若手（学部生からポスドクまで）への支援を充実させる。具体的には、以下のような対策を検討する。

#### (1) 若手と大御所・中堅の交流の促進

- ・大御所・中堅が、若手の発表（ポスター・口頭・若手賞）にもっとコメントする
- ・若手優秀者発表選考会は裏番組無、発表者と大御所の先生の飲み会を開催する
- ・若手と先生方が間近で議論できる機会を作る（大会内、大会外）
- ・大会シンポジウムを若手と大御所がペアでオーガナイズする
- ・若手の会でエクスカージョンを企画する シニアも参加する

#### (2) 若手が大会で質問をして成長できる環境を作る

- ・若手優先質問時間枠を設定するか、座長が配慮する
- ・質問することの重要性を若手に理解してもらう機会を作る
- ・若手が質問することをシニアが応援するよう周知する
- ・若手の会で「質問の仕方 実践トレーニング」を行う
- ・質問した学生は参加費無料（あるいは、「学生は無料だが質問すること」）
- ・若手が質問したら、懇親会割引
- ・切れ味の良い質問をした若手を対象とした最優秀ディスカッション賞

#### (3) 若手の興味を惹く大会プログラムを設定する

- ・最近 PI になった人の「苦勞～サクセスストーリー」シンポジウム
- ・「How to become a PI」テーブルディスカッション
- ・細胞生物学の分野で活躍中の先生の（若手研究者・学生向けの）講演会
- ・若手に対する賞を増やす。ポスター発表や一般講演にも賞を出す。
- ・学生への経済的な援助（参加費無料）
- ・PI の先生方に、学生を数人引きつけて参加するよう依頼（団体割引）
- ・若手や女性がオーガナイズするシンポジウムを優先的に採択
- ・若手を指名してシンポジウムを企画させる（強制ではない）

#### (4) 若手が積極的に大会・学会運営に参加するような体制作り

- ・若手の会を大会の重要な部分として位置付ける
- ・若い人がどんどん運営に参加して活躍する体制にする
- ・若手の会の意見を反映し、「若手の声が届く」学会とするシステムを作る
- ・若手の会でシニアから、「若手研究者サバイバル虎の巻」のネタを仕入れる
- ・「若手研究者サバイバル虎の巻」を若手の会 HP に up する
- ・若手の会を地方でも開催し、学部生を勧誘する（布教活動）
- ・他学会の優秀な若手研究者に、大会での講演を依頼して会員になってもらう
- ・若手の会で講演者を呼ぶ予算をもう少し上げる
- ・若手を毎年10人くらい将来計画委員会に呼んで、意見・愚痴を聞く
- ・学生からPI候補者、中堅、大御所までが同じ会議で議論する場を提供する
- ・他の学会の若手の会と連携する
- ・若手の会の運営体制をしっかりした組織にする

#### 【対策(若手向け以外)】

- ・中堅も育成する（若手PIとPI予備軍の研究者を対象としたシンポジウム）
- ・PI候補者の紳士録（一人1頁）を作成し、job hunting に生かす
- ・Skypeを用いた講演も行うことで、子育て研究者が参加しやすくする
- ・委員会での議論のまとめを学会幹部が読んで終わりではなく、実行に移す
- ・懇親会や会報をメントラの班会議のように工夫することで会員の連帯感を醸成
- ・大会の楽しさ・気軽さを生かすため、地方都市開催を積極的に検討する
- ・奇を衒うことはなく、それぞれの学会員が切磋琢磨すればよいのでは
- ・レベルの高い・面白い研究に関する議論が活発に行われていればそれでよい
- ・様々な分野の専門家が細胞生物学の専門家と交流するサロンのような場
- ・MD会員を増やす（疾患をテーマにしたセッションを設ける）
- ・病理の先生方や基礎志向の医学部生と、細胞生物学会は親和性が高い
- ・企業研究者の方に積極的に学会に参画してもらう
- ・ランチョンを増やす
- ・技術講習会を開催する（組織細胞化学会のように）
- ・マニアックを極めて濃い学会にする
- ・数・物・化の研究者を巻き込んで、ヘテロな怪しい集団になる
- ・異分野融合のセッション（構造生物学、物理学、合成化学、理論など）

- 様々な学会と合同大会を行い、他学会のよいところを取り入れていく
- シンポジウムの分野をもう少し分野を広げる（異分野とのコラボを開拓）
- 分子生物学会・生化学会と差別化する・特色を出す（何？）
- 会員資格審査を厳格にする（学会のグランクラス・プレミア化）
- このまま小さくなってよいのでは（会場費が安くなる）
- 発生生物学会と合併する
- 学会誌 CSF に積極的に投稿し、細胞生物学会の認知度・存在感を上げる